

## 接続助詞的トコロデの歴史的変遷 —トコロガとの関係再考—

三浦さつき

「今から出かけたところで、3時に京都は間に合わない」のような、トコロデを使った逆接仮定表現の歴史的変遷について扱った。中世後期にはこの表現は存在せず、ホドニ、ニヨッテと同様の原因・理由を表す表現として存在していた。これらは近世前期には少数例を残して失われ、先に逆接仮定表現を有していたトコロガから近代期に逆接仮定表現を得るというのがこれまでの説〔靄岡昭夫（1972）「「ところが」と「ところで」の通時的考察—その逆接仮定表現用法の成立時期をめぐって」『国語学』88〕であった。

本発表では未調査である中古トコロニテから扱い、これまで詳細がわからなかった中世後期トコロデへの拡大の様子と、近代で逆接用法を得る素地が近世にあったか、トコロガはトコロデよりもなぜ先に逆接仮定用法を得たのかを観点に調査を行った。その結果、①中古から中世後期にかけては、中古では場所、状況の格関係、断定助動詞ナリ連用形ニ+接続助詞テの中止法で構成される様相を見せ、中世後期の文構造拡大では、これらの全てが源流になり、形成される因果関係も時間や状況、属性同定から連続していること。②トコロガの形は中世前期から見られ、箇所、面といった意味を持ち、述語で存在表現や感情形容詞、属性形容詞を表すところから、前句が動詞連体形になり、後件が評価性、動詞句を接する接続表現へと拡張したこと、③トコロデの逆接仮定への経路は、近世期に未実現に傾いたトコロデの時間用法が、その展開や結果を表すことで判断性を獲得したことがその素地を形成したこと、④トコロガ、トコロデの逆接仮定表現は共に歴史的には不定語を接する例が存在せず、このことから典型的にはトコロデの逆接仮定は既知だけを表し、対して並列表現ができるテモ等のトコロデ以外の逆接表現は、全称的で既知も未知も表すことが出来る性質であることを述べた。